

平成 20 年度 文部科学省委託

総合的な放課後対策のための調査研究

「放課後子どもプラン」における 地域の人材や資源を活用した学習支援のあり方



高知県放課後学び場応援事業推進委員会

＜協力＞ 高知工科大学
高知県立須崎高等学校
ベネッセコーポレーション

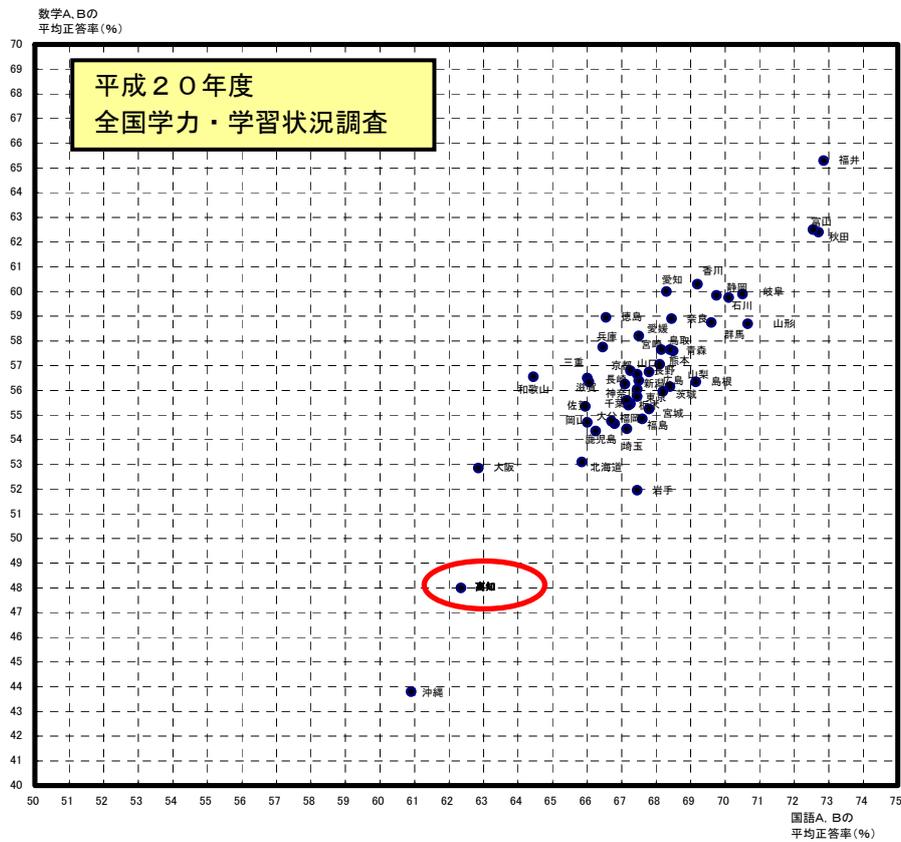
総合的な放課後対策のための調査研究に至る経緯

1. 高知県の現状

高知県では、平成19年度全国学力・学習状況調査において、小学校は、ほぼ全国並みであったが、中学校では、全国平均を大きく下回る結果となった。

その理由の一つとして、多くの中学生は、授業以外で学習する時間が少なく、家庭での学習が十分に定着していない、ということが指摘されている。

このため、県では、家庭の状況によらず、全ての子どもたちが自ら意欲的に学ぶ習慣を身に付けられるよう、今後3年間で全小学校区に「放課後子どもプラン」の設置に取り組む、その中の学習アドバイザー等を配置した「学び場」において、学習習慣の定着に向けた支援を行うこととしている。



県独自で啓発パンフレットを作成し、放課後子どもプラン推進事業の取り組みを推進しているが、全小学校区での実施にまでは至っていない。



2. 事業の概要

- (1) 事業のテーマ 「放課後子どもプラン」における、地域の人材や資源を活用した学習支援のあり方
- (2) 事業の背景・必要性

家庭での学習が十分に定着していない。



(全国学力・学習状況調査より)

今後3年間で、全ての小学校区に「放課後学び場」を設置

- <課題>・学校以外での勉強時間が、小学校では2極化、中学校では極端な減少がみられる。
- ・地域の人材が少ない小学校区が多い。

<参考>学校の授業時間以外の勉強時間

	高知県	全国		高知県	全国
【2時間以上】			【30分未満】		
(小学校)	33.4%	25.5%	(小学校)	16.6%	16.1%
(中学校)	29.1%	35.4%	(中学校)	25.0%	18.6%

(3) 事業の実施内容・方法

対象者 : 各小学校の1～6年生で参加を希望する児童

実施方法 : ①チーム(5名程度)による学習支援

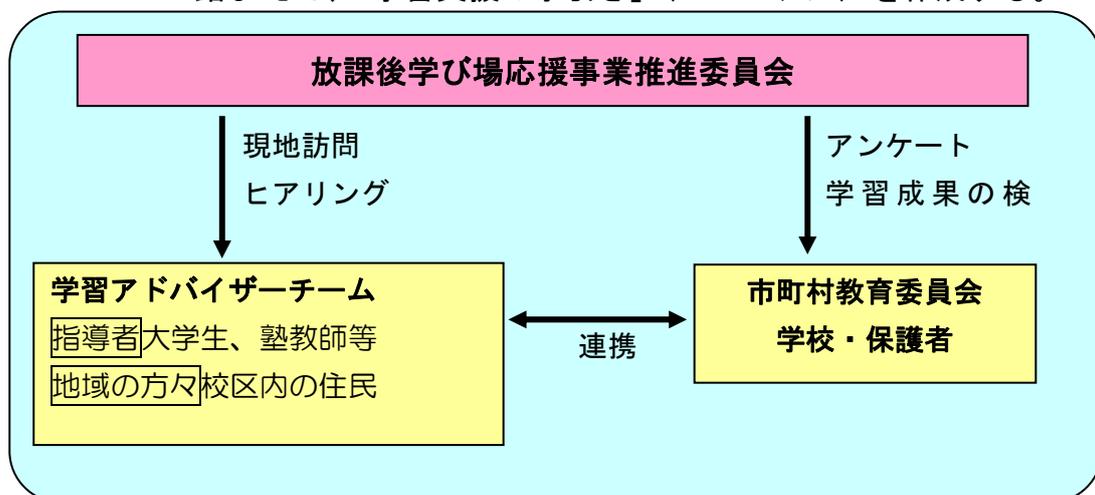
年齢や経験等が異なる者がチーム編成することにより、多様な視点から子どもへの援助を行う。

②学校や保護者との連携

実施前や期間中に定期的に、学校、保護者とチーム員が学習内容の協議を行う。

③推進委員会による現地調査

ヒアリングやアンケート調査を行い、実施校ごとの比較、検証を踏まえて、「学習支援の手引き」(マニュアル)を作成する。



プログラムコンセプト

- ◆ 学校の延長ではない学習機会の提供
- ◆ 体験的な学習で、考える力を培う
- ◆ 国語力（読む、書く、話す）と科学的な探究心を培う

津野町立精華小学校（60名）

回数：週1回（土）
対象：全校希望者（1～6年）
学習：科学教室や読み聞かせなど
指導：地元ボランティア、学習指導員

香南市立野市小学校（615名）

回数：週3回（月、水、木）
対象：塾や課外活動をしていない児童（4～6年）
学習：宿題支援、読み聞かせなど
指導：学習指導員、学生ボランティア、読み聞かせ指導員
機能：センターとの連携

須崎市立須崎小学校（330名）

回数：週3回（月、水、金）
対象：家庭学習が十分でない児童等（1～3年）
学習：宿題や副教材
指導：公民館職員、学習指導員、読み聞かせ指導員

（4）事業の目標とする効果・成果

- ・ 学習成果を検証する全国学力調査や単元テスト等での得点率の向上
- ・ 生活アンケート等での家庭での学習時間や生活態度の向上

高知県放課後学び場応援事業推進委員会の取り組み

1. 事業の目的

県内の「放課後子どもプラン」実施校において、地域の実情に応じた効果的な学習支援のあり方を検証するとともに、学習アドバイザーの人材確保と養成のシステムを構築する。

2. 推進委員会の取り組み

<推進委員>

	氏名	役職	立場
1	神家 一成	高知大学教育学部教授	学識経験者
2	吉本 哲男	高知県小中学校校長会理事	学校
3	平山 幸恵	高知県小中学校PTA連合会理事	PTA
4	町田 知枝	安田町教育委員会社会教育主事	子ども教室関係者
5	濱田 久美子	高知県教育委員会事務局生涯学習課長	県行政

(1) 第1回推進委員会 平成20年11月14日（火）

- 協議
- ・今後の放課後の学び場応援事業の進め方について
 - ・今後のスケジュール

（協議内容より）

- ・「人」や「もの」をつぎ込んで成り立つものは、長続きしない。地域の協力が得られることが重要。
- ・学校の場所を借りて地域が実施するもので、学校を通じて募集をするのであれば学校の理解が重要であるし、その趣旨をくんでもらえるような配慮が必要。
- ・保護者は、参加してみたいと思うので、各家庭まで情報が届くような工夫をすることが必要。

(2) 第2回推進委員会 平成21年3月13日（金）

- 協議
- ・今後の方向性について
 - ・新たな中学校での「放課後学習室」の設置について

（協議内容より）

- ・学校が事業の趣旨を充分理解し、連携するためには、行政機関組織内での学校教育と社会教育の連携が必要不可欠である。
- ・中学校での学び場には、子どもと話ができる、関われる指導者が必要。
- ・中学校では、学校と連携して対象者をリストアップし、参加を働きかけるような方法が良いと思われる。また、クラブ活動参加の有無に関わらず対象者がすべて参加できるような様々な開催方法を考える必要がある。
- ・学校内で実施するのが望ましいが、教員の負担増になっては本末転倒であり学校活動とは切り離しての実施をすることが必要。しかし、子どもについての学校との連携は必要である。

モデル的放課後子ども教室の取り組み

本事業では、学校規模や対象の子ども・学年や子どもの状況により異なる3種類のモデル的な放課後子ども教室を設置し調査研究を行った。

<モデル1> 須崎小学校（中規模校）：

放課後児童クラブに登録していない1～3年生

<モデル2> 精華小学校（小規模校）：全学年

<モデル3> 野市小学校（大規模校）：放課後児童クラブを修了した4～6年生

① 須崎市 すさき放課後しろやま教室

<活動内容>

- (1) 開設日時 週3回（月・水・金）15時から16時30分まで
- (2) 開設場所 小学校内空き教室
- (3) 運営方法 教育委員会と地域の方による運営
- (4) 対象児童 放課後児童クラブに登録していない1～3年生で家庭学習に支援の必要な児童等（開始時35名登録）

(5) 実施状況

月	日	曜	参加者	参加平均	月	日	曜	参加者	参加平均	
11月	21日	金	31名	30.6名	2月	2日	月	23名	16.1名	
	26日	水	37名			4日	水	21名		
	28日	金	24名			6日	金	17名		
12月	3日	水	30名	24.0名		9日	月	21名		19.1名
	5日	金	27名			13日	金	9名		
	8日	月	29名			20日	金	21名		
	10日	水	32名			23日	月	16名		
	12日	金	26名		25日	水	9名			
	15日	月	22名		27日	金	8名			
	17日	水	20名		3月	2日	月	14名		
19日	金	20名	4日	水		15名				
1月	14日	水	29名	21.5名		6日	金	20名		
	16日	金	15名		9日	月	16名			
	19日	月	26名		11日	水	25名			
	21日	水	18名		13日	金	24名			
	23日	金	17名		16日	月	20名			
	26日	月	23名		18日	水	19名			
	28日	水	19名							
	30日	金	25名							

- (6) 内 容 家庭学習の支援・読み聞かせ
- (7) 指 導 者 地域のボランティア・公民館職員・保育士・須崎高校生6名
- (8) 特 徴

須崎市では、家庭的に支援の必要な子どもや学力に課題のある子どもへの学習支援に取り組むため、各家庭へ公募する一方、学校と行政が直接参加を呼びかけ、一人ひとりにていねいな指導を行っている。また、指導者には様々な地域の方や、地元高校生が協力することで成果を上げている。



地元高校生も支援者として参加

地元支援者による寄り添う指導



(9) 成果と課題

- 開始当初は、学習態度に課題があった子どもが多かったが、全体的に勉強へのとりかかりや態度が良くなり、集中して宿題に取り組み手際よく終わらせられるようになった。
- かけ算で覚えにくい所がある子どもに集中して覚えさせたり、2ケタの掛け算のやり方を十分に理解できていない子どもに1対1できめ細かい対応することにより、しっかり理解することができ、その成果を本人も喜んでいる。このようにして、「もっとやれる、やってみたい」という学ぶ喜び、楽しさ、意欲が見られるようになった。
- 絵本の読み聞かせは、数人のグループに読みはじめると、子どもたちは集中して、絵本の世界に入り込んで楽しんでいるが、全員の子どもたちにはなかなか受け入れられないため、設定時間の工夫等が必要と思われる。
- 「4年生になっても来たい」との児童の思いもあるので、対象学年については今後の運営について検討する。



②津野町 精華小学校区体験教室

<活動内容>

- (1) 開設日時 月1～2回土曜日
9:00～11:30
- (2) 開設場所 校区内の公民館(大野集会所)
- (3) 運営方法 教育委員会と実行委員会による運営
- (4) 対象児童 全校児童の中で希望者
(開始時11名登録)
- (5) 実施状況



実施日	参加人数	内容	講師
平成20年11月29日(土)	5人	・宿題タイム ・手芸教室	地域の応援隊「和」代表 西元和代さん
平成20年12月13日(土)	6人	・宿題タイム ・科学実験	高知県教育員会生涯学習課
平成21年1月10日(土)	6人	・テスト ・科学実験	高知県教育員会生涯学習課
平成21年1月31日(土)	6人	・宿題タイム ・手芸教室	地域の応援隊「和」代表 西元和代さん
平成21年2月14日(土)	3人	・テスト ・工作教室	地域の応援隊「和」代表 西元和代さん

(6) 内 容 宿題タイム・木工教室・読書タイム・科学実験教室等



楽しい体験教室前の学習時間



静電気を使っでの科学実験

- (7) 参加料 500円(保険料)
- (8) 指導者 地域のボランティア・県教委

(9) 特 徴 全校児童60名の小規模校のため、週末に子どもたちが集まって遊ぶ機会が少なくなっていることから、様々なことに興味関心が持てるように体験型のプログラムを実施した。

土曜日の開催にもかかわらず、継続しての参加が見られたことは、地域の中に子どもたちの居場所が確保されたことの現れだと思われる。また、保護者の送迎により参加する子どももおり、子ども教室への理解も浸透してきている。

振動を使っでの実験



空気の流れを使っでの実験

(10) 成果と課題

宿題タイム、模擬テストの際は、いずれも落ち着いて取り組みができた。

学校側からは、科学実験において、普段の授業では体験できないことを楽しみながら学ぶことができ、その効果が学校の授業態度にも反映されてきている、と評価をもらっている。

参加した児童の保護者からは、学ぶ体験ができたということに加え、仕事などで不在の際、子どもの安全安心な居場所づくりにもつながったとの声が寄せられ、一定の成果が得られたと考えている。

③香南市 野市小学校放課後子ども教室

<活動内容>

- (1) 開設日時 毎週3回（月・水・木） 15:00～17:30
- (2) 開設場所 野市小学校内地域連携室
- (3) 運営方法 教育委員会と実行委員会による運営
- (4) 対象児童 4～6年生
- (5) 実施状況

月	日	曜	参加者	参加平均	月	日	曜	参加者	参加平均
12月	22日	月	7名	8.5名	2月	16日	月	9名	10.4名
	25日	木	10名			18日	水	10名	
1月	8日	木	8名	9.5名	19日	木	11名		
	14日	水	8名		23日	月	11名		
	19日	月	11名		25日	水	10名		
	21日	水	10名		26日	木	13名		
	22日	木	11名		3月	2日	月	12名	
	26日	月	10名			4日	水	10名	
	28日	水	7名			5日	木	13名	
29日	木	11名	9日			月	13名		
2月	2日	月	10名		11日	水	11名		
	4日	水	9名		12日	木	13名		
	5日	木	10名	16日	月	14名			
	9日	月	10名	18日	水	9名			
	12日	木	11名	11.9名					

(6) 内 容 学習タイム・読み聞かせ・体験学習・自由活動



からくり人形を使っの教室

- (7) 参加料 2,000円(保険料、実費教材費)
- (8) 指導者 地域のボランティア・高知工科大学学生9名
- (9) 特徴

野市小学校の放課後児童クラブでは、新興住宅地を抱え、現在その利用者は急増している。

今年度新たに開設した放課後子ども教室では、児童クラブを修了した4～6年生のうち、スポーツクラブ等に参加していない児童を対象として実施している。開始当初の登録児童は5名であったが、活動が定着してくると、徐々に利用児童が増加している。また、近隣の高知工科大学学生が参加し、学習指導面でも効果があらわれている。

活動内容については、指導者がすべて計画するのではなく子どもたちの自主性を考慮するなど、学校の方針とリンクした取り組みとなっている。

(10) 成果と課題

事業開始当初は、学校の全面的な協力により立ち上げを行ったが、保護者の関心が薄く、説明会への出席はゼロであった。

しかし、コーディネーター・学習アドバイザー等スタッフの「子どもの自立心を育てること」「楽しい教室にすること」という思いが徐々に伝わり、特に4年生の間で参加が広まり、同時に保護者の理解も徐々に得られていった。

また、近隣の高知工科大学生ボランティアサークルの協力も得られ、先生でなく、親でもなく、兄弟でもないその存在は、勉強も見てくれて、体当たりで遊んでくれる頼もしいお兄さんお姉さんとして、この教室に活力をもたらしている。

中には学習の苦手な児童もあり、隣に寄り添い熱心に指導・応援するスタッフがいることで、この教室で毎回宿題に取り組むことができるようになった。他の児童も含め、学習習慣の定着には、今後大きな成果があるものと期待している。野市地区にある県立青少年センターの協力を得て、からくり人形の仕組みなどの体験学習を実施した。これからも子どもたちが興味関心があり、“見たい、やりたい”ものを活動に取り組んでいくことにより、子どもたちの生きる力を伸ばし、「楽しい」教室を創り上げることとしている。

学力テスト・意識調査 結果分析

1. 調査対象児童の状況

① すさき放課後しろやま教室

放課後児童クラブに登録していないの1～3年生で家庭的・学力的に支援の必要な児童等

② 精華小学校区体験教室

全校児童の中で希望者

③ 野市小学校放課後子ども教室

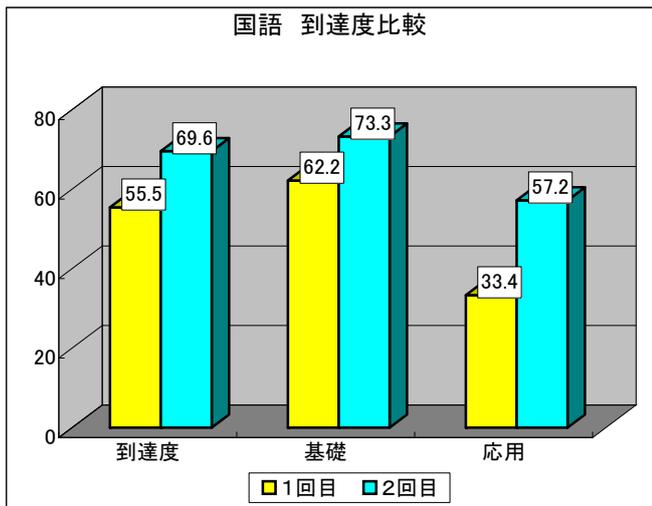
児童クラブを終えた4～6年生で習い事・スポーツクラブ等に参加していない児童

2. 教科に関する調査結果

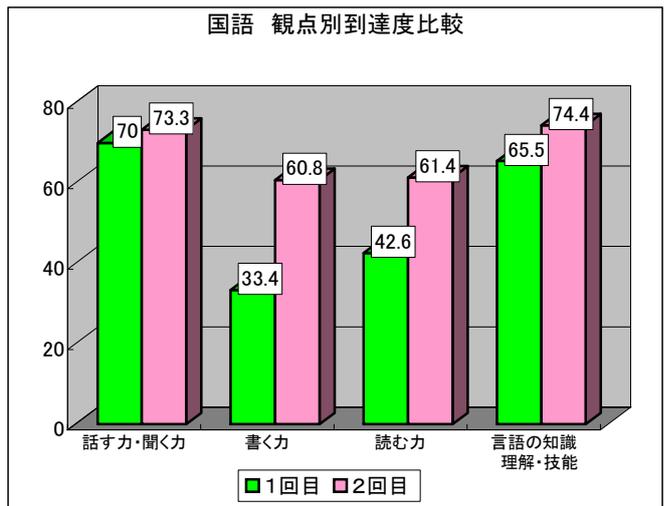
(1) 国語

	平均到達度			基礎			応用		
	1回目	2回目	増減	1回目	2回目	増減	1回目	2回目	増減
全学年 国語	55.5	69.6	14.1	62.2	73.3	11.1	33.4	57.2	23.8
第1回調査 42人 第2回調査 22人	観点別					1回目	2回目	増減	
	話す力・聞く力					70	73.3	3.3	
	書く力					33.4	60.8	27.4	
	読む力					42.6	61.4	18.8	
	言語についての知識・理解・技能					65.5	74.4	8.9	

国語 到達度比較



国語 観点別到達度比較



<結果分析>

国語の結果は、1回目の検査と2回目の検査との間があまり空いていないにも関わらず、すべての項目に渡ってポイントが上がっている。上昇値は、上記データのとおりである。

上昇の要因を考えてみると、低学年（1，2年生）のポイント向上によるところが大きいと思われる。

＜基礎＞ 1年：20.0 → 100.0 2年：33.3 → 63.6

＜応用＞ 1年：20.0 → 100.0

＜書く力＞ 1年：20.0 → 100.0 2年：0.0 → 45.5

＜読む力＞ 1年：0.0 → 100.0 2年：22.2 → 63.6

＜言語の知識・理解・技能＞ 1年：20.0 → 100.0 2年：55.6 → 63.6

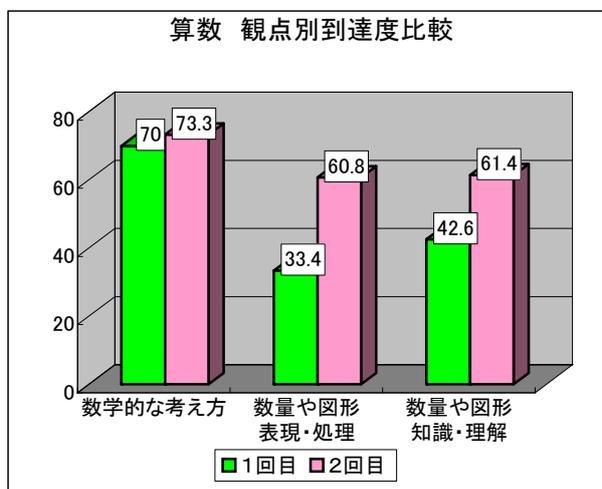
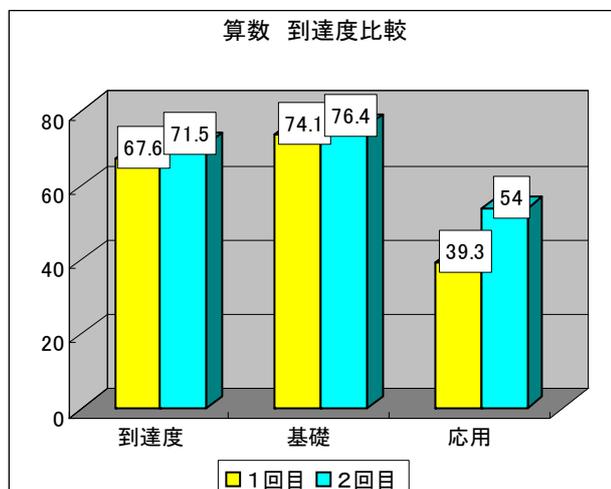
低学年の上昇が顕著にみられる要因として、低学年の受験者数の大半を占める須崎小学校の取り組みによるところが大きいと考えられる。

前述のように、須崎小学校では家庭学習の徹底を目的として開始された放課後子ども教室である。支援者がそばに付き、子どもが分からなければすぐ対応するという方法をとっており、最後まで家庭学習を仕上げて下校をするようにしている。また、家庭学習の終了後には絵本の読み聞かせ等を行い、読書に親しむ様にし、自由読書も可能にしている。

その結果、開始の頃と比べると、落ち着いて学習する雰囲気ができ、書く字も丁寧になり、それに伴い、書く力・読む力・言語の知識理解の向上がみられたものと思われる。

(2) 算数

全学年 算数	平均到達度			基礎			応用		
	1回目	2回目	増減	1回目	2回目	増減	1回目	2回目	増減
	67.6	71.5	3.9	74.1	76.4	2.3	39.3	54	14.7
第1回調査 44人	観点別						1回目	2回目	増減
第2回調査 28人	数学的な考え方						70	73.3	3.3
	数量や図形についての表現・処理						33.4	60.8	27.4
	数量や図形についての知識・理解						42.6	61.4	18.8



算数の検査結果についても、国語と同様な結果がみられ、低学年の達成率向上によるところが大きいと考えられる。

＜基礎＞ 1年：80.0 → 100.0 2年：55.6 → 81.8

＜応用＞ 1年：20.0 → 100.0 2年：44.4 → 72.7

＜数学的な考え方＞ 1年：20.0 → 100.0

＜数量・図形の表現・処理＞ 1年：40.0 → 100.0 2年：66.7 → 100.0

＜数量・図形の知識・理解＞ 1年：60.0 → 100.0 2年：33.3 → 36.4

低学年の上昇が顕著にみられる要因として、開始の頃と比べると、落ち着いて学習する雰囲気ができ、計算の答え合わせ、わからない所があったときに即時に支援者が教える体制がとられていることなどが考えられる。

3. 意識に関する調査結果

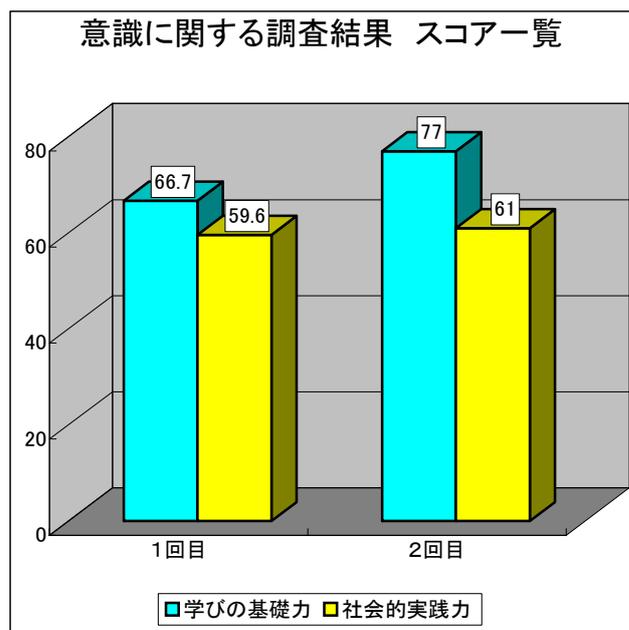
意識に関する調査第1回調査 43人 第2回調査 22人

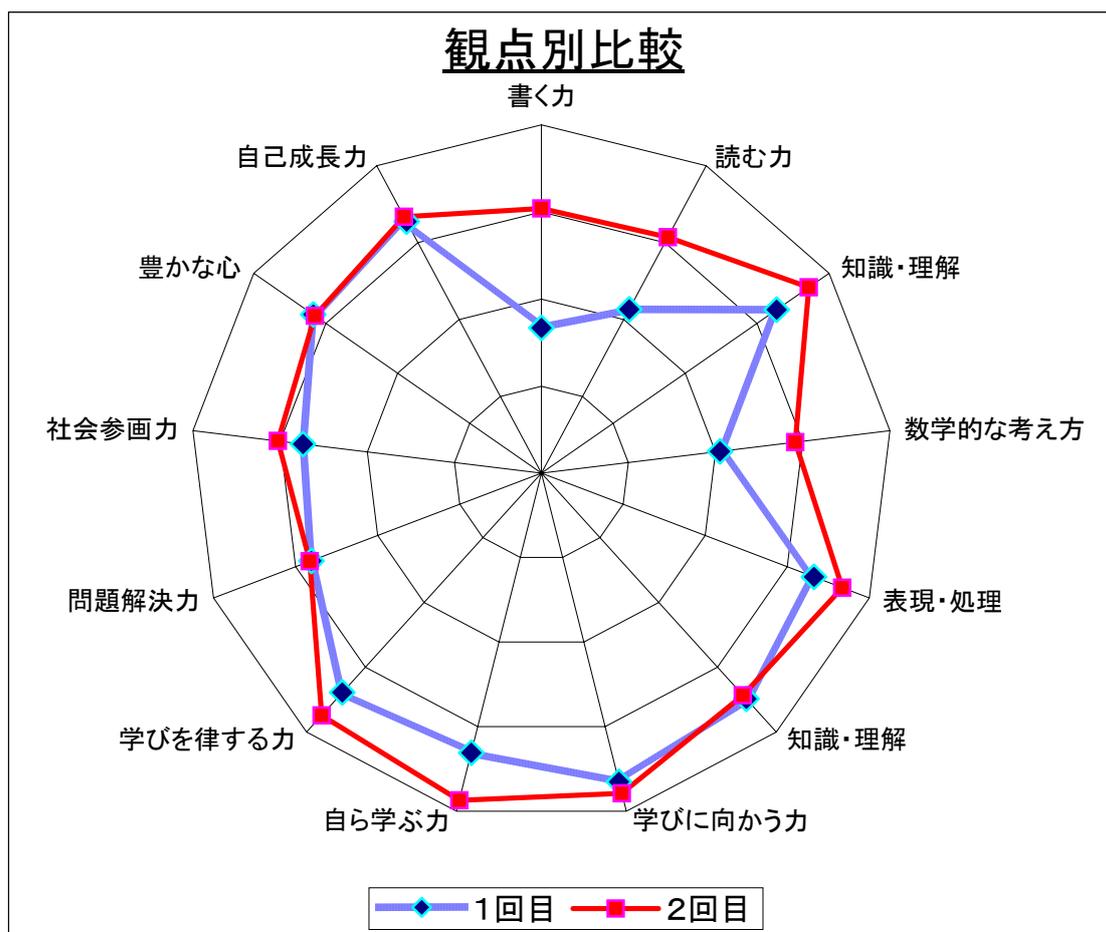
＜学びの基礎力＞

	1回目	2回目	増減		1回目	2回目	増減
(全体)	66.7	77	10.3	学びを律する力	67.8	74.9	7.1
豊かな基礎体験	63.4	75.8	12.4	学習継続力	67.8	76.5	8.7
学びに向かう力	73.1	83.2	10.1	学習のけじめ	65.1	72	6.9
感じ取る力	60.2	75	14.8	学習環境の整備	70.2	75.8	5.6
学習動機	86.3	90.5	4.2	授業を受ける姿勢	67.7	75.3	7.6
自己効力感	76.2	83.1	6.9				
自己責任	64.7	81.8	17.1				
自ら学ぶ力	66.2	77.4	11.2				
学習スキル	72.5	81.8	9.3				
学習定着のための方略	62.9	67.4	4.5				
学習計画力	50.2	55.6	5.4				
自己学習習慣	69.5	82.8	13.3				

＜社会的実践力＞

	1回目	2回目	増減
(全体)	59.6	61	1.4
社会的実践力			
問題解決力	56.2	56.5	0.3
社会参画力	54.8	60.5	5.7
豊かな心	63.5	63	-0.5
自己成長力	65.5	66.7	1.2





2回の検査間の時間が短く、対象人数が少ないこと、同じ問題で実施したことなどの課題があったが、結果は前述のとおり変化がみられた。

その要因として国語・算数については、宿題をきちんとすること、分からない点があればすぐ質問できる条件があること、自ら考えて学習する場面があることなど様々な学力向上の要因が考えられるが、総合的に考えると、子ども一人ひとりに対応した学習の要件を満たす環境づくりができたことが要因の一つではないかと思われる。

また、意識に関する内容でも総合・観点別とも向上がみられ、短期間でも子どもの意識は変化することがわかった。要因は、勉強がわかるという満足感、わかれば次の学習に向かう向上心、一つわかったのだから次の問題についても解決できるのだという学習に対する自信などが、放課後の学習によってしっかりと養われてきたのではないかと考える。

事業実施にあたっての制作品



「学び場」を開設するにあたって、参加する子どもたちが楽しくすごすことが継続のためには不可欠と考え、読書や読み聞かせを行った際に、自分の感じたこと想像した内容などを自由にかくことのできるA4・B5サイズの「読書ノート」を作成した。かくことは決して強制ではなく、本の世界を楽しむための1つの手段として自由に使っている。



放課後の学び場で成果を上げるためには、家庭の協力が必要である。家庭でできる学力向上の基礎となる活動について、ベネッセコーポレーションの協力をいただき、冊子「楽しく学ぶアイデア15」として配布し、各家庭に理解を得ている。内容は、“勉強ができたら、大きなままでほめる”“「なんでできないの？」は、ぐっとこらえて”“「あこがれ」と「ライバル」は必要”といったような家庭で心がける内容で構成されている。

事業全体についての分析

本事業では、学校規模や対象の子ども・学年や子どもの状況により異なる3種類のモデルケースの結果から以下のような成果が得られた。

[モデルケース]

- ①須崎小学校（中規模校）：放課後児童クラブに登録していない1～3年生
（特に家庭学習に支援が必要な子どもには別途呼びかけをする）
- ②精華小学校（小規模校）：全学年
- ③野市小学校（大規模校）：放課後児童クラブを修了した4～6年生

(1) 地域の人材活用について

従来から実施している「放課後子ども教室」の大人の支援者に加えて、須崎小学校・野市小学校では、高校生・大学生が指導者として参加した。今まで、子ども教室のボランティアを募集しても、地域の人材に限りがあり、なかなか集まらない現状があった。しかし、今回地域にある高等学校と大学校に有償ボランティアを依頼したところ快諾を得て、各教室とも毎回5名程度が参加をしている。最初は、子どもへの支援の方法にとまどっていたようであるが、子どもと年令も近いこともあり、お兄さん、お姉さんのような存在で、小学生の参加意欲にもつながった。また、高校生、大学生にとっても、将来の職業選択や社会性を身に付けるうえで、貴重な経験を積むことができ双方向への効果が上げられたと考える。

今後も、高校生・大学生の活用について、他の子ども教室へも働きかけていく必要がある。

(2) 対象や目的を明確にした活動内容の設定について

須崎小学校では「家庭学習の徹底」、精華小学校では「体験を中心とした学習への意欲付け」、野市小学校では「子どもの自主性の発揮」ということを明確にしたため、指導者が適切に支援することができ、効果を上げられた。

(3) 学校との効果的な連携のあり方について

子どもの生活には、学校→放課後→家庭という連続性が大切で、連携が不可欠である。教育委員会が中心となって学校での様子・子どもの状況・家庭の状況等をふまえた活動内容や支援のあり方を検討し、実践することの必要性が確認できた

個人情報等のプライバシーに関わる内容も含まれてくることも留意しながら、可能な限り互いに情報提供が必要だと思われる。

[今後の取り組み]

本事業の調査研究により得られた成果を、放課後子ども教室の運営方法・取り組み内容等のモデルケースとして、他の教室や未実施校区の課題解決と取り組みの充実につなげることができるよう、研修会やフォーラムを通じて周知を図ることとしている。